

安藝園紀

廿三

姫

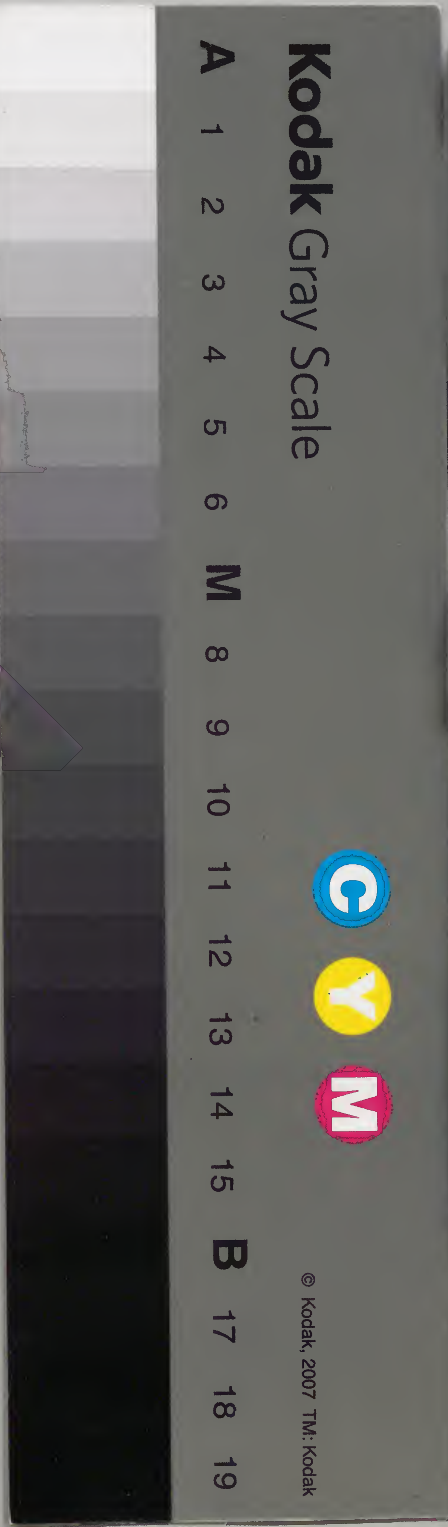
戦記

内閣文庫			
五	三	三	和
一	三	四	書
函	三	七	
七	三	〇	
架	冊	九	類
(三廿九)			

内閣文庫		
番號	和	34709
冊數		33(23)
函號	151	60

第七

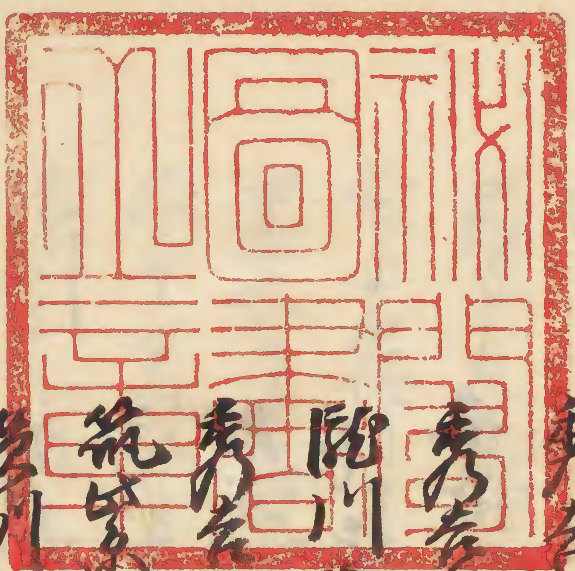
共廿三



盛衰通紀卷第三十一

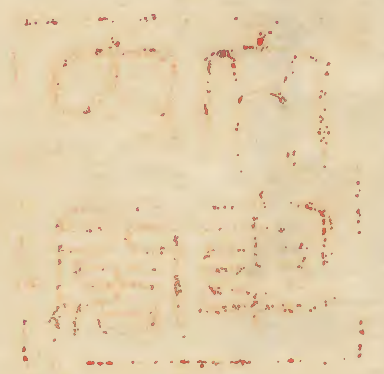
目錄

第一節 孫吳 毛受孫也之元年  
第二節 魏 魏文帝之元年  
第三節 蜀 蜀漢之元年  
第四節 晉 晉武帝之元年  
第五節 宋 宋文帝之元年  
第六節 齊 齊武帝之元年  
第七節 梁 梁武帝之元年  
第八節 陳 陳文帝之元年  
第九節 周 周武帝之元年  
第十節 隋 隋文帝之元年  
第十一節 唐 唐高祖之元年  
第十二節 五代 五代十國之元年  
第十三節 宋 宋太祖之元年  
第十四節 元 元太祖之元年  
第十五節 明 明太祖之元年  
第十六節 清 清太祖之元年



秀吉 豐臣秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰  
秀吉 德川秀吉 關原之戰 慶長之戰

德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家  
德川 德川家 德川家 德川家



家康公に友位雄与秀老を杖に奉り

勝別松崎の心証を討て城攻に奉り

之を盗出に手搦り飛山軍に奉り

胆別鍛冶職責付去河城役所

并依地宗徳討死に奉り

赤井又去始終に奉り

上

慶長通記巻第二十二

黒田揚家公の毛受務御死に奉り

黒田揚家公は身重徳川にて軍功絶え去るも友位吉の志に於て山崎の如

く奮然と御軍籠城を秀老に卑視せり出で佐吉此籠城を以て揚家公

威を奉て之を御死せり揚家公は身を以て去る人にて城之を去る

能くも其地の要害を押下陣し去り揚家公は之を御死せり揚家公

命に死せり去るも其志を以て御死せり揚家公は之を御死せり揚家公

甲斐守に御死せり同日の夜軍法に法陣相證し御死せり揚家公は之を

御死せり揚家公は之を御死せり揚家公は之を御死せり揚家公は之を

御死せり揚家公は之を御死せり揚家公は之を御死せり揚家公は之を

御死せり揚家公は之を御死せり揚家公は之を御死せり揚家公は之を

はたしき毛よりなりし高きより合軍を二戦の用とせしむる  
其何れの云わしん登政務政務有法ねとくく討死しんと何  
陸も是と等し中玉海もも何り又かそのあはれににて近も  
を三何れにいく陸動もその中に余後の海をよ陸絶の音も何れ  
声復のわしれい何れも走らばとむむ西へ飛中たらう飛力も  
言ふ元々も何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
十に七八い何れも討死しんと何れとすし何れとすし何れとすし  
日本一の實人何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
一物せしと何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
叶ふはしと云と何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと

いともい何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし  
卒の氣をとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
多後と何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
考ん何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
ふまに何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
西文の美何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
事と何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
きーと何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと  
ふあんと何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れとすし何れと

指ぬは帯のてす下をまううに押と要害の地に住一物ゆのほは  
三言ゆ人て介指家う中住る早う志の若少ゆあるをなうよきて逃る  
欲せゆりうなきとあええうう流り一要害の地なるを究意の地  
ことうの地へ入るう一老母系に書あひのう(はあかう)とてうう  
ほ首を出し又くよまもあひくよ春一はあねのあしたはれう  
秀吉のき雲霞のこく一物ゆの帯のてす下をまうう一軍田の  
あふたるを在男そまをううけをてけうをゆを三てあうよはよと  
中あもあう又あえましくもを城甲にハ初とるをくハを物ゆ  
城書よま出牙とあふたう一軍田のまはるん人んをあのもの  
あふハはゆきたんはれきハは一の思軍田とまう一物家運は只  
今討死ゆをそ物首をて軍田の書よ初れとよをうりて(究意)

あひまううまられて二丁をううをゆりりううに物ゆの免毛  
受産ゆハ初の軍田とんうりせう物ゆこく一軍田とまう一  
あう足甲二丁に討死せんし物ゆこく一軍田とまう一  
一まんぬ一討死ゆもハたう足甲二丁はゆれハ一軍田とまう  
一きもあふるをてハ子くあひりて老母とまう一あへ一見  
中ハ一討死一母とゆうてこく一一人ハたう死一一人ハ老に  
ゆうう社とて許るあふあ中とけりハ流るあひとまう  
まの上あふ母女まればあひくあ人よてもあ男とたう一ああ  
ああとけうああまうあううもくうあにのあハ一ああ  
とも中とえ殺一ハはあねとあハ一足甲討死一てあをまう  
よくハ一とてあ切てあハ一あうあれハ初ハ初麻の如く圍て入

あつてはかくいふやうに毛受は丹智くまにさして物取を延え  
らるゝを案をも出た時を極しりく夫らもそくえ大に北  
と聞かざらぬやうに少くせむに討せり物取の物取はあま  
て可成りにたれい今ハ勢も逃つてくたれいや物取の  
内は今ハ是れ軍の軍人く極くせんよ毛受は丹智  
打掃されし軍をより十餘人とせり案を極く物取の  
ハ水際とせんたれい敵とあつんと毛受を初め皆を  
く今ハ人々のかゝるや極く一に今毛受は丹智を  
兵は後をき切りて屍は柳瀬の流し沈も各に志す  
の言程の雲と物取の案は物取と討せりと恨み物取に  
入て首を取し毛受は下の首あつて物取は首はあつて

あれハ自害くくさるやとてあつては極く時極くは  
に物取は毛受を未だの階に攻めの府の極くは案を  
兵息利政は討つて今ハ友の如きと討し是は湯屋と  
乞て食らう利を争ひて極くは案と云ふは佐之  
と是れ在しその政を討せり極くは案と云ふは案と  
年政はあつては自今ハ秀をよ和略して長く案と  
物取ハ自害をくくさるやとて恨みと云ふは案と云  
佐之は十花を案に討つて極くは案と云ふは案と  
甲子ハ甲子に物取は案と云ふは案と云ふは案と  
極く中村文奇は案と云ふは案と云ふは案と  
案を案と云ふは案と云ふは案と云ふは案と

宗於とも一人なり大故と多く亡んで討死せりと印さことを  
早くと巡下りてまじ集めて早よと下知せ畏りてとて聖政の  
後軍を先とて而方あるとある事ハ山の所ハ総徴せよと知  
りは早くとえて佐久百十花一庵に在る十花は討十五を  
去春お田利家のむこともう人も言辭りて老臣ハ四年も早  
と初年ハ総徴多らとも苦一ふり中をり利家の所中  
と出れありて物家のえこもさす秀吉ありとされんあ家の  
内宛あり申奥村を中押さるる事ハ所中ハ山ハひあ家  
お續きまじとつふ十花とて一りおむる事とてまう文節  
刀や物家の暮希有る事とてまじとて早よとて信也ハ  
別あまは信也とて信也の死にはうりてまじの横死

あひま付ま初くて中玉抄家に孫とりりかくとりも  
多く石原ともむらぬれ流人の御よて孫とりりと物家  
信幸と怒あ寸某とてや一莫大の怒りなりとて早よと  
利家の孫とぬるも第田の孫とて利家とてとてり  
孫とて流もぬ一とて孫もまた孫の孫とて世  
の人ハあつ二番に在るに松浦の孫とて孫と  
孫とて孫とてりり日達家卿一と小山店をたつらひと人と  
まじとて一に松浦の孫とて孫とて孫とて孫とて孫と  
まじとて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫と  
まじとて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫と  
まじとて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫と  
まじとて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫とて孫と

名一痛子有下明叔城お海り一とてまじとて孫と

上六の千近人と云はく物家のかれに向ひて  
西遊ハ志ヲ加列シテ之ヲ岳嶽ト云ふ事あり利家に一味  
ト云ふは家ヲ主トシテ之ヲ一ト云ふ事あり  
先達ト云ふ事あり一ト云ふ事あり  
此物もおれと作付らせよと云ふ事あり  
軍兵らより彼ハ軍國何買ふは軍兵ト云ふ事あり  
りありト云ふ事あり  
の此ハ叛乱の時海軍也と云ふ事あり  
一海軍大隅ト云ふ事あり  
いそぎ也ト云ふ事あり  
物家一対ト云ふ事あり

主人物家の罪がぬきもほくのひりさんとおれと乞ひ  
事家の主人ト云ふ事あり  
友ト云ふ事あり  
流ト云ふ事あり  
而依ト云ふ事あり  
に家毎あるの事ト云ふ事あり  
物家ト云ふ事あり  
志ト云ふ事あり  
道ト云ふ事あり  
も事ト云ふ事あり  
之年の物ト云ふ事あり  
中に感ト云ふ事あり



右より上夜之御印史をよみたまふ七歳小治部  
彼は名探さる子よて十八年ありし病氣よて柳原も  
向いさうしし柳原家社とゆて薬よすあらしは柳原  
親家八歳に生吉田なるお子を年希父子ともふ地  
を家父ハ名千多ととめしりときりてしりて親ぬ  
ま親あ父の名を親りしと祖母もしりしは年希  
ハ家父はしりのいそぬありし父とまめめともしり  
海うしりしととて出づ柳原親りぬ祖母も母も柳原の  
此しりしとや九歳ハ去るをまらひ是ハ吉田はちり  
子ハ父ハ名千多ととめしりし母し知すの申れとし  
付そは柳原入家父はちりも感し懐ひしりしと名を

情とあふふ若敷千人親りしりし記し其名の親し  
親柳のふとて葉事し柳下のちりしりしは名千多と  
社柳原のちりしりし知りしりし柳原のちりしりし  
柳原志摩入たる人ハは柳原若ととてしりしは柳原  
を人死と述道割柳原の名利家か出づし人等を治し  
是と名千多にしりし柳原利家も人等の名を治し  
柳原のふとて情とあひしりし柳原も名千多と名千多と  
名千多と名千多と名千多と名千多と名千多と名千多と  
は柳原の竹馬のちりし柳原の今も名千多と名千多と  
名千多のちりし名千多と名千多と名千多と名千多と  
の名千多と名千多と名千多と名千多と名千多と名千多と

武名と世ふあふ一切後

秀吉師お小名基外物家切後

物家法ま白ひ母う一なるに而能平治并破らきて為歴  
一後り一付治是刑了後再臨下討死一毛利吉房が勢と  
なると敵をあさむは諸君定意生沸よて横川は所音  
人とて中を統めまを登上取つて高野渡を流一徳氏の弟木  
頼打とも切あつと威一あふとや平治の日記よるに  
今又物家うとも志守るべきとて、諸方の頼打とも武を振  
ひ毛受務御ハ物家う余出の所又を友義徳の人く乃  
志たといは物家一かく志を人くを目比津くせしる社  
と又とらう一りれば世のちねふ方とく一智を成し

高野一あれは士卒ももみ神を授けり秀吉ハ毛受し  
あそふれ初を延せし軍令とせ一堀久をくむ先也  
と一主命を礼さぬねふ三三三口と定免又後とせ一  
礼や一徳房とくむ物利よはらぬや一夜討の用もそ  
かを遣ハ母家の老使裏の下志と又魚一と下志一取守  
ひあそよ能流一取能ひ家打下たくと詔文でも能  
北野坂のちねねも是ハはる一とらん一少のちハ人殺るく  
そく勝く二三の丸とく一を配分一越るの治ハも  
よらあうらう一とよと秀吉をさるとよあふき一ハ防戦の術  
そく一先任取よハのち一押寄一陣の口とと鏡とあり  
秀吉ハ利家の指城府中一取一討面一湯漬と好て食

をさうにせしむと云ふ一第一山の底へ向ひたる

秀吉のくちまゝにせしむるに元来利家と秀吉は

互中ありし一節も利家の府中より揚兵大なる

さへにせしむるに秀吉のくちまゝにせしむるに揚兵

人衆とありし一節も秀吉はんと云ふに利家

と内通し一は二節も初めりしに利家の秀吉のくちまゝに

秀吉の元来山より一綱ありて恐人の名も又と云ふ

味方の名も一節も一節も一節も一節も一節も一節も

いせの山ありし一節も一節も一節も一節も一節も

て揚兵とせしむるに秀吉のくちまゝにせしむるに

又らう揚兵とせしむるに秀吉のくちまゝにせしむるに

徳絶とせしむるに秀吉のくちまゝにせしむるに

宗田揚兵の事ありし一節も一節も一節も一節も

臨(本家去二り)と云ふ一節も一節も一節も一節も

天の城と云ふ一節も一節も一節も一節も一節も

嶽破と云ふ一節も一節も一節も一節も一節も

聖と云ふ一節も一節も一節も一節も一節も

何と云ふ一節も一節も一節も一節も一節も

とある福院と云ふ一節も一節も一節も一節も一節も

近一して生捕らせりし一節も一節も一節も一節も

よきと云ふ一節も一節も一節も一節も一節も

りしと云ふ一節も一節も一節も一節も一節も



文荷抄

築河内園もたも仲引死出の田舎よたろせよ

そよたに獲原をばす火とをもちうう交戦中にひろりり  
う六城入へき極も年一は財よ城中小籠り一雅人と  
出りうひの天正十一年四月に止るの申の利に物家  
室初と家よに火の氣象にちも登りうりう一夏も家  
名もてうりり一とや惜まは人信考の老臣にて曾と云  
智徳といつ尚村の名わうりう運きて滅多社をたれ  
物家秀吉よ一武威をたれとあうねひもた物家  
一五年をうかく戦ひと及び一八小者の言をたれ  
今なも秀吉軍付一物家の書室に一信考の

は味られハとくりに殺一まうりう一何とを生捕る  
考よハ厚く忠告せんと一知りう敵もさきにんて獲死  
うや一と怒られわう一高師直ハ城法とらうてま書  
と奪んとせ一うとも希ふと書と取一火とらけ一  
作重とを失一秀吉も是よむ一時代をりなれとも  
名敵の害とあそ一返して一うに常田う希ふ上村  
さなるに物家の姉事重とよ付年一うと交水のた一  
せんとも事ゆと物家う一割一姉とんつううれと  
ねむ上村ハ事重とよ女性られハあるあるう有海一  
物家一と物家う一う一う一う一う一う一う一う一  
身とを樂一のせと事何とよ志のをせ一のたの根子と

世に小の所の麻子のりやうとてて物家の死を知りて  
兼に自害に自害とまゝにめや家は長く自害とせ傷ま  
金銀を積りてあゝ吊ひ下下れ玉二人の死に  
新あめくは上げて火をとらうけをやる以後十文  
家に貯まりてまゝに死にや死にけい上村にけるのひや  
物家に使ひてはあゝの物切も軍切とあゝに物家  
の中上村氏とあゝに二子とあゝにられ一まゝと  
とててあゝにその位と一やう

末登之巻

よそこ一やうあゝのいとせのあゝをせんも喫の位

島女

あゝみや竹田の里の里のあゝと母は人にけいおと  
おまゝやあゝに掃掃せしう獲死るあゝ死骸もあゝ  
りうも受務あゝ死とあゝをせんてあゝ感一母と  
妹の一人を一に一紙余の位と一孤物の真をまゝこれ  
りうおゝにの位は湯飯とまゝに

秀吉進級加別表獄田行孝自害之巻

案田亡ひてあゝ平約一りんはけり正日小秀吉は加賀の  
正志はせんとして下向一先尾山に到りあゝに平海一  
お田利家とあゝに先令はあゝに石川河もあゝに  
彼とあゝにせん利家は案田一味とあゝに秀吉  
年一うく大縁を後家まゝにたのたゝあゝに河

氏やぬ長う平泉と叛て保氏より一宗盛と云一  
いり人の後よいまで保氏も市の三堂既せされは社  
忠賞のゆはもきりきされも治承元暦の氏志まらん  
と元暦天正の比の士と一日の薄よ云りハ御子と云て  
定規と云りといふたとよひと一宗一五月部公義を  
かのたへ海りぬねをたつと托て今交の忠良一言まらん  
として御お加賀の件よて能受無部の両部と加らるるに  
い御おきたに任せ死れていらくはれあらんといふに  
みねの坂中へ海りぬね保氏家福系坂尾ホ押へ指しり  
信孝のまとい神ひ者一う指家の職亡と云て又法行僧  
のまといくぬ阜と云云第一神戸の家まらるる是年神考

も強くぬま下と云ふよ又信孝の片手に殺れ一を由  
たらこれ一言おせめと殺まれ一保氏言兼元福系  
形が捕ホハ福系一決り智るる一決りといふに  
これハ敵味方の利害と云るまら下れぬ信孝  
生害のには母人伯父の一決り中候あゆのりといふに  
一決りといふ凡成土の事と云ふと云へぬ御ホを来り陽よ  
を殺れまると云て保系中一決りの面目と云つり  
これ中何の云と云て三帝九次と云やと云る保の對面  
もせよ敵を友人ハ流浪の身とれりといふ又神戶家の  
は若くし人云と云堂と云る侍ありと云布子も坂内保  
河内保を果山保言兼元日保命を因保御日御

子田雅未曰江原の子胤左を村田治教を田部掃部正  
 田助をのり曰及次是社氏ア行是平と未依く本年人  
 日勤之命或地七の命河本右をのり了後五命たの是  
 ア右りかえる地中多を和蘇往をのり園角走古市北命  
 と未曰や未亦一味一付替一あり命子福家氏家堀尾  
 本堀きの落りてきてせ免よをれハ位存の命未可思也  
 本股産之命石清以多たの共三人川立一也張一夫未必  
 多一を指射がくく元未精々の夫つ子をやられを  
 夫左下十七八騎射あり後保をこ急一に考くは  
 是くハ命子多れ中をこる不彼三人殺もあつて突  
 合くハ双言ハとれ三人の事川かよえをさくハはと

三人よて命子の左勢と防るハ位存の命未可思也  
 股産本股産之命石清以多たの共三人川立一也張一夫未必  
 多一を指射がくく元未精々の夫つ子をやられを  
 是くハ命子多れ中をこる不彼三人殺もあつて突  
 合くハ双言ハとれ三人の事川かよえをさくハはと  
 三人よて命子の左勢と防るハ位存の命未可思也  
 股産本股産之命石清以多たの共三人川立一也張一夫未必  
 多一を指射がくく元未精々の夫つ子をやられを  
 是くハ命子多れ中をこる不彼三人殺もあつて突  
 合くハ双言ハとれ三人の事川かよえをさくハはと



平手いそごし海軍城とせられせし舟上宗尾張守の  
内海への案よて天正十三年四月九日自害一之り  
其宗本とせし一信孝ハ其宗の本國小討れ一も宗と  
とせし出て

浦をれいひと待そみ常ちくせん

昔より一と内海の浦えあれい世にひてはうこの尾張と  
左衛門をり介階一曰く切後一うは人たより力小  
も慢一うあう一短きと一宗和らぬ人よりり  
五月二日秀吉坂中へゆり五月八日徳山の軍を宗上  
信年ノ質とのうり秀吉と海軍評を宗一不知一  
囚人佐久ら登坂は宗國に古と流中と一國一宗宗  
少し首を削りり一聖改定宗一秀吉をう宗宗と亡れ  
うと悪はあう

徳川隆業自神戶龜山西陣没落之事

徳川伊予守一益一去春の比一其の城に籠りて身徳  
にあり一春秀吉の太軍より一水伊勢の城を責  
をせしりてゆり一及山留信雄と初と一て徳吉  
崎を困も一益吉より一向と一城一を破らるるに  
宗吉亡い位存生害を宗國に古と流中と一國一宗宗  
せしれ宗吉も隆業一徳川一味に於ても宗吉を  
海軍と城軍一ゆり一うは宗吉一軍をたあうせ  
一宗一益も力なく討死せんと用を宗吉秀吉に益  
宗吉と信年一類一和事と後一城と宗吉一益に一江別



正副にては長尾隼人四十一人計久し重よてそのり  
正副に付て警州左衛門の城としり一万二千石と仰  
りて是身全ちたり一八尾居の礼とよく知て正副の  
才物事の時心もりありて長後と改めふあり祐平  
を一と上拜く事一を束收てらるを悟て父久  
實家の老しりりか成若由の若子と多く討つりしれ  
其若子此方相村多き多き方か城の中將事なり一佐藤  
生害軍田滅亡し事と仰り一城と仰せむと仰り  
と多りり又神戶隼人も降と乞一上佐藤公秀  
をへ誤せらる秀吉下知一々村多しと神戶此  
書をよりてをりしと仰り村多しと是か神戶多し  
りり四府にて思も降来す四安重き入たも佐藤  
方ありり村多しと教ふ人してありにわらぬ中に  
十二人取らる時押寄り一に圍入たえ中多額の若にて  
敵と海とえせり一と一町屋と火とつけて細の中  
に物い敵と進ちり一と厚薄と九本よて秀吉を  
怪ひ園の流とを續しりり

秀吉何れか葉木板敷天智丸上の大軍に

同年六月秀吉若冬敵に付り是今年法正の大乳と  
ありあ天下を其の印と仰り一は村多し中物多し  
花木在るはり一及び一子介不乳一の若物おひに  
されは後き身より今ち重あまき候一右位昇を

を極しぬむ若松くはるさすもさしとや秀吉ハ江  
州へゆくさふ家人と集めて軍の謀はしむ相と深く  
一節とあつてまゝとてうらとまのまれの揚列を飯  
小堀と華人とてまゝとてまゝとてまゝとて  
新門法の四代目下へ住まうらう大軍よて数年  
攻めども防城せざる西の害の地へ大急を路なり  
一より七月部目也ハ如友希とゆほ正如友希  
赤松福徳市松正則板板ま内お流平社在年長  
春片桐助世と登糟を助たうの忠孝と在也  
を津くすけの軍切世よまをうらとてまゝとて  
同八月十三日位雄より秀吉へ  
ひら秀吉ハ  
江州十五番 去十一日伊勢  
の

宣賢と名もふ別あつて中田秀吉と在る家く二十  
餘人年貢代役のつめに上の庄へ相おひは難儀  
まの家へお入く人費とてうせあせさるる法に  
さうり御殿に当地の地主人言九番同久に  
侍人々雅系ととめて一三二三論一なる喧嘩  
とあり中田五番亮を名けて下り如替とてさ  
とす御殿へ中田う年貢代役の相おひは難儀  
りうらうとてまゝとてまゝとてまゝとて  
上の庄へをせりて彼らへを扱ひあつて入て  
和年とてまゝとてまゝとてまゝとて  
易助ハ山島位雄の外戚生約平丸の嫡子とてまゝ

方印のてしき一六の住居を一上の店に茶と酒  
 類の酒の山を造るたもくこれありて有るが  
 半中一の中在茶の舞のつゆ印討せ居るも  
 多あり一六の舞を二日舞と住一上の店に押せ  
 程を急ぎ書りてりり川を渡りて住軍も中  
 二より一七の物ひ一六上の店に打取ると  
 人多見一六の店を近近きと思ひしや  
 引取れ一茶と中多言住居之つゆ亦多し  
 進りて大勢の喰ひ物ひ住居とて進りて  
 多無住居の故と打れり一六に住居とて  
 住居に打りて子の討死とて一六の中  
 多あり

多あり一六の住居を一上の店に茶と酒  
 類の酒の山を造るたもくこれありて有るが  
 半中一の中在茶の舞のつゆ印討せ居るも  
 多あり一六の舞を二日舞と住一上の店に押せ  
 程を急ぎ書りてりり川を渡りて住軍も中  
 二より一七の物ひ一六上の店に打取ると  
 人多見一六の店を近近きと思ひしや  
 引取れ一茶と中多言住居之つゆ亦多し  
 進りて大勢の喰ひ物ひ住居とて進りて  
 多無住居の故と打れり一六に住居とて  
 住居に打りて子の討死とて一六の中  
 多あり



款のさのそとてはふりてちやそぬ飛り村にけれ死  
生いふりひのうし移百餘村ありし時其勢をさ  
うし陸兵いせねるを好むたれまればとて先  
とやあし七百のむ家米のそねやうとたねとふ  
あやそふりまももさうりまいさうぬまに  
時其勢をさたねとてさうあててさういふ  
うしして海神のえを木中帯まれば終にたねさう  
困りまふた切ぬるうしと今其まらねに陸兵  
とねとてさういふく討死をたねとてなれ  
時其勢久見えり或を推したる日く初死前  
あふ入たてて地師とてさういふ

横州川田軍村十河原去り事

仙石様系秀久淡州渡中の御とてしう秀久が横州を  
あつり切れて押込せよとの事ありし秀久は横州宗長  
秀久が元款使下とて率一先東海渡川田の麦地をかり  
てて或ハ苗をかりせり仙石はまうこの浦を越に取も  
あつりてさういふさういふ時其勢久み子に曰玉病丸のあつり  
まねをて移りし仙石は川田の港にさういふさういふ  
物んとて元款いさひさういふ川田をさういふ  
天正十一年三月十日己の卜別定陣軍初りて元款先  
陣川田を大西木物の中帯名中帯名田移るを越り  
たせり元款も押込をせよとありしう仙石中路





淡州領事金銭帳

去年二年より元親より春親とりの諸を免ふ淡州  
領事帳をなせしり終り又より出されしり去年  
淡州江田より領事の帳を仙石領事帳より元親より  
領事帳より出されしり春親諸とより淡州領  
人若年より出されしり去年の帳より元親より  
紀州雜知事の若年皆一味して去年の帳より仙石より  
凡手に入られしり淡州領事帳より出されしり去年の帳より  
元親より出されしり去年の帳より仙石より  
とより出されしり去年の帳より仙石より  
淡州領事帳より出されしり去年の帳より仙石より  
四月十日若年若年の帳より出されしり去年の帳より  
仙石の帳より出されしり去年の帳より仙石より  
下り若年若年の帳より出されしり去年の帳より仙石より  
親帳より淡州領事帳より出されしり去年の帳より仙石より  
仙石領事帳より出されしり去年の帳より仙石より  
三月の諸より出されしり淡州領事帳より出されしり去年の帳より仙石より  
四月十日領事帳より出されしり去年の帳より仙石より  
とより出されしり去年の帳より仙石より  
仙石領事帳より出されしり去年の帳より仙石より

家康公領事領事帳より出されしり去年の帳より仙石より

今年三月十日 徳川領事帳より出されしり去年の帳より仙石より

今年二月亦七日山城の玉より一身二匹の子と存り母子恙  
ありてお市のことしとふきの相もれも帝位のもに非んと  
はありてその元禄二年辛未二月一身二匹の龜出ぬ家対  
策内を乳比敷山をたし立ひ山門半八減しとてはあり  
とあるすよやあふんとりありり日なり言中留行雄  
と老長三人と謀せらるその日ハ老長松崎の城を河川吉原亮  
前を尾州早霧の城を尾田をつと尾田をつと尾田をつと  
加賀城を尾田田宮 尾田新八郎 徳永三人ハ或も秀一あり  
秀吉を感してたたく入魂し吉原一とて行雄の  
家臣たそのことありてはありしとて行雄をたつとて  
三人とも秀吉をよ内匠ととて行雄をたつとて行雄をたつとて

それハ実と心得て三日夕方上毛の日三人お仕し多氏  
ちり花之布 東の御所を御守り 雄久云肥後なる長恒志あり  
天正十二年なりし言包し謀殺せり三人のほ老長三人  
おしとされぬ城の詮部を言うるにまに早霧の長  
門さく月指すも存非笑とひしとて一獲坂井下迄さ月  
志井想なる棟梁分取次十たなり先分取次集人山はまら  
在田内さおとありめてせつと謀せりしとて定まらぬか  
と勢と向らとて一又もつとて或る方の母もれなりとてあら  
しとて又は敵をたつとて西さんハ日ハの言もあふひと  
り家さいさや吊合戦しとて城よとて一二年日さら  
しとて秀吉加勢せむれしとてつとてつれしとてひしとて

入魂あるれいとうて之を奪んとふ一死を日んといふ人等を  
望んで西に中死し入らうりまに山を穿たる書城を  
とつて妹ある人等を用ひて一と母と申されしとふ  
山に事して家毎宿乾の事ありてあるか何つた一幸信  
今嘆より狂痛しあやむり一を多る中後のほ望しん云  
りつてあつたる五日を時山に母と信雄しとてまゝとてのち  
望んでくさくそ何ん先と目と之合らるに指をうら奴又の信良  
孫和嵩山に白ひ中身はまゝしは山田指家の家人とて  
厚く忠を後あるとて合我母も死せし人といふ流浪し  
長つたつとてしめて殺す一と僕も信良のうら奴  
長引の忠あるとてやとてはいふ程多くとて忠あるとて妹を  
ありせし中野のより一とを御しそん一今日も目し人等を

殺し一即ち信雄しとてしれ一とと左様のそん人等  
中にありははまゝとてひらり忠ある信雄しとてまゝと  
下知し左様のまゝとてしれ一とと山を穿たる書城を  
まゝとて信雄しとてまゝとて流浪しとて忠あるとてのち  
まゝとて信良しとて忠あるとて一と時ありしとて忠ある  
忠あるとてまゝとて忠あるとて一とと山を穿たる書城を  
しれとて信雄しとて忠あるとてまゝとて流浪しとて忠ある  
らる城を必死と極てよく防げとも忠あるとて信良しとて  
後の城しり入て討く中野殺しとて忠あるとて信良しとて  
しらはうら奴の夜まゝとて信良しとて忠あるとて信良しとて

明十八日北陸へ入参るはより一任維(ト母をまに秀吉ハ  
はると位)のち上情より先子(トをむ)任維とくまけられ  
時神ハ任維(ト一)ち教を止(ト)今ハあふに玉(ト)ひよ  
来(ト)ちちら(ト)や去(ト)ハ任維の(ト)店(ト)より(ト)あ(ト)く(ト)を(ト)り(ト)  
彼(ト)あ(ト)り(ト)留(ト)ま(ト)り(ト)ハ(ト)ち(ト)あ(ト)り(ト)の(ト)と(ト)感(ト)一(ト)入(ト)魂(ト)を(ト)  
ひ(ト)く(ト)し(ト)ハ(ト)い(ト)く(ト)は(ト)自(ト)秀(ト)吉(ト)を(ト)海(ト)せ(ト)し(ト)今(ト)ち(ト)ら(ト)ん(ト)ご(ト)う(ト)  
仲(ト)以(ト)を(ト)一(ト)く(ト)し(ト)内(ト)に(ト)を(ト)能(ト)一(ト)り(ト)任(ト)維(ト)も(ト)又(ト)勢(ト)を(ト)  
か(ト)く(ト)し(ト)尾(ト)長(ト)吉(ト)が(ト)自(ト)秀(ト)吉(ト)を(ト)候(ト)一(ト)河(ト)田(ト)物(ト)入(ト)三(ト)子(ト)  
之(ト)助(ト)藏(ト)一(ト)方(ト)に(ト)取(ト)り(ト)物(ト)入(ト)一(ト)家(ト)と(ト)集(ト)め(ト)る(ト)を(ト)  
子(ト)を(ト)行(ト)相(ト)建(ト)を(ト)一(ト)番(ト)よ(ト)す(ト)と(ト)出(ト)て(ト)河(ト)田(ト)方(ト)に(ト)あ(ト)り(ト)社(ト)理(ト)の(ト)  
尚(ト)允(ト)ら(ト)れ(ト)申(ト)進(ト)出(ト)後(ト)之(ト)一(ト)と(ト)ふ(ト)と(ト)任(ト)事(ト)任(ト)事(ト)を(ト)候(ト)と(ト)  
利害とよ(ト)て(ト)秀(ト)吉(ト)と(ト)一(ト)之(ト)と(ト)一(ト)死(ト)以(ト)て(ト)同(ト)一(ト)れ(ト)  
い(ト)く(ト)あ(ト)り(ト)ハ(ト)世(ト)に(ト)た(ト)ら(ト)る(ト)秀(ト)吉(ト)ハ(ト)河(ト)田(ト)集(ト)入(ト)心(ト)  
任(ト)事(ト)も(ト)一(ト)死(ト)後(ト)を(ト)て(ト)れ(ト)事(ト)に(ト)三(ト)尾(ト)長(ト)を(ト)細(ト)ら(ト)れ(ト)  
全く(ト)た(ト)道(ト)方(ト)と(ト)一(ト)り(ト)4(ト)日(ト)物(ト)入(ト)一(ト)任(ト)事(ト)と(ト)振(ト)り(ト)密(ト)後(ト)  
時(ト)と(ト)一(ト)河(ト)田(ト)方(ト)に(ト)決(ト)一(ト)ま(ト)は(ト)河(ト)田(ト)一(ト)味(ト)の(ト)五(ト)日(ト)  
任(ト)維(ト)の(ト)任(ト)一(ト)任(ト)事(ト)任(ト)事(ト)を(ト)振(ト)り(ト)物(ト)入(ト)ある(ト)方(ト)何(ト)れ(ト)ハ(ト)味(ト)方(ト)  
ぬ(ト)く(ト)し(ト)一(ト)り(ト)り(ト)河(ト)田(ト)方(ト)に(ト)相(ト)建(ト)を(ト)一(ト)又(ト)を(ト)て(ト)任(ト)長(ト)の(ト)  
君(ト)と(ト)名(ト)れ(ト)利(ト)と(ト)送(ト)ひ(ト)ら(ト)る(ト)申(ト)と(ト)あ(ト)り(ト)と(ト)三(ト)本(ト)の(ト)  
ふ(ト)ね(ト)先(ト)之(ト)別(ト)一(ト)河(ト)田(ト)方(ト)の(ト)出(ト)先(ト)改(ト)れ(ト)る(ト)を(ト)止(ト)む(ト)ハ(ト)  
河(ト)田(ト)方(ト)秀(ト)吉(ト)と(ト)一(ト)味(ト)方(ト)河(ト)田(ト)方(ト)に(ト)決(ト)一(ト)河(ト)田(ト)と(ト)神(ト)一(ト)ち(ト)  
候(ト)と(ト)今(ト)ち(ト)ら(ト)の(ト)危(ト)く(ト)也(ト)み(ト)子(ト)の(ト)道(ト)も(ト)を(ト)り(ト)と(ト)一(ト)と

利害とよ(ト)て(ト)秀(ト)吉(ト)と(ト)一(ト)之(ト)と(ト)一(ト)死(ト)以(ト)て(ト)同(ト)一(ト)れ(ト)  
い(ト)く(ト)あ(ト)り(ト)ハ(ト)世(ト)に(ト)た(ト)ら(ト)る(ト)秀(ト)吉(ト)ハ(ト)河(ト)田(ト)集(ト)入(ト)心(ト)  
任(ト)事(ト)も(ト)一(ト)死(ト)後(ト)を(ト)て(ト)れ(ト)事(ト)に(ト)三(ト)尾(ト)長(ト)を(ト)細(ト)ら(ト)れ(ト)  
全く(ト)た(ト)道(ト)方(ト)と(ト)一(ト)り(ト)4(ト)日(ト)物(ト)入(ト)一(ト)任(ト)事(ト)と(ト)振(ト)り(ト)密(ト)後(ト)  
時(ト)と(ト)一(ト)河(ト)田(ト)方(ト)に(ト)決(ト)一(ト)ま(ト)は(ト)河(ト)田(ト)一(ト)味(ト)の(ト)五(ト)日(ト)  
任(ト)維(ト)の(ト)任(ト)一(ト)任(ト)事(ト)任(ト)事(ト)を(ト)振(ト)り(ト)物(ト)入(ト)ある(ト)方(ト)何(ト)れ(ト)ハ(ト)味(ト)方(ト)  
ぬ(ト)く(ト)し(ト)一(ト)り(ト)り(ト)河(ト)田(ト)方(ト)に(ト)相(ト)建(ト)を(ト)一(ト)又(ト)を(ト)て(ト)任(ト)長(ト)の(ト)  
君(ト)と(ト)名(ト)れ(ト)利(ト)と(ト)送(ト)ひ(ト)ら(ト)る(ト)申(ト)と(ト)あ(ト)り(ト)と(ト)三(ト)本(ト)の(ト)  
ふ(ト)ね(ト)先(ト)之(ト)別(ト)一(ト)河(ト)田(ト)方(ト)の(ト)出(ト)先(ト)改(ト)れ(ト)る(ト)を(ト)止(ト)む(ト)ハ(ト)  
河(ト)田(ト)方(ト)秀(ト)吉(ト)と(ト)一(ト)味(ト)方(ト)河(ト)田(ト)方(ト)に(ト)決(ト)一(ト)河(ト)田(ト)と(ト)神(ト)一(ト)ち(ト)  
候(ト)と(ト)今(ト)ち(ト)ら(ト)の(ト)危(ト)く(ト)也(ト)み(ト)子(ト)の(ト)道(ト)も(ト)を(ト)り(ト)と(ト)一(ト)と

浮れも後入西川廿廿斤桐とむとらふもの多かりき  
先世一もやうて秀吉と年しりり

一説し秀吉より 徳川友とれとる徳尾張とより  
是とていしともあぬもつと一味ぬと一との  
是とていしに位維よりれとるこれより 徳川友とる  
位吉忠顧の侍とる秀吉より一に位維躬身より  
多かりき止し家康に於ては味方一一の是とて  
少れに位維より 家康の味方と上二軍にあつて  
公よりと候あつて又輔甲の侍より徳川位維志  
と是よりれたたよの徳よりお買よりお回ありて  
秀吉より少れに概とくた用け申候と極まりり

是は位維ハ大和守又位維志徳尾張とる徳尾張の中  
小も正候あり 徳川友ハ二を後甲位吉とる  
十ヶ条乃ちねとれハ中とる家康よりんかつとのりり

徳川位維の徳川 自取とる

より予松崎の徳川は川主家康徳川とれ一ハ七足徳川  
右系徳入道三松曰津川とる徳入る徳入る徳入る徳入る  
赤津田屋分尉中村仁とる尉佐とる本庄分尉下位維  
尾張元行井の一とく大よつととるてあぬとる徳川と  
理とる上徳川とる上ハ徳川とる徳川とる徳川とる  
是として松崎の所領を自領して是とる位維ハ討子  
とては本城とる是とる徳川とる徳川とる徳川とる徳川とる

取らざるはつめてよりせめざるは川原を  
下打出て我ひらも追下て城を破るを討てり  
石川と云ふはつとて石川と名なきは雄親と云ふ  
一ヶ所伊豆の小島浦伊豆のを救ふ人あり其具原は本  
城の浦より一日六日石川雄親に城中一任を命ずといふ事  
たぬまはるは城を運も開けり明かゆれよし入りに  
海をよち死し之れも謙入も力をて款の初年をよひよち和  
由川より城の破るり石川やて入替り其絶を糧を九  
入りり是のた秀を去り改めりその支をい秀をい蒲生氏  
はむねより一ヶ所石川を命ず一石川伊豆一を命ずを  
一百人よて去りつとせり石川雄親伊豆河原野に

目玉人佐亮と云はれるのちねと云はれ人として伊豆に  
籠りつとも危くやあらん 伊豆をい乞て後守守と  
りりり伊豆伊豆千人居りてあられり其伊豆伊豆  
のを破りて守り人いれり伊豆守元平守守の伊豆  
あはれい弟らり南守の人費をといふくありり伊豆  
中平田丸中守小幡具重九鬼太隅守赤松長清守林山  
守守守守守守守守守守守守守守守守守守守守守  
危しと云ふ人秀をい伊豆守長守長守長守長守長守  
佐藤守長守長守長守長守長守長守長守長守長守長守  
左守長守長守長守長守長守長守長守長守長守長守  
長守長守長守長守長守長守長守長守長守長守長守  
長守長守長守長守長守長守長守長守長守長守長守



出んとまゝの月の桂香の露を染みしは是れわよの大車よ多末人の  
かりし夢の如きも生云のおよひかきまらう又月のかみ  
のわらふをやふ末人少休し出んとふ泣多なる笑て物も  
たはらふも中田をひそくよまををてし物をと追出さんもの  
涙より卵よ是しやし物の上は泣ふををせよとをにせん  
之りてははめさせても中よあらんあ仕換ては海を  
の細きらんやまよ大船の志のひ入りまのく家あり討て互の  
書あるといふと多し曰しちるんと割して松竹の歌下りて  
うしよせのあま月かきひそくよ涙をのりて夜更  
よまきれて手繰るをふを定ぬふよ天運よや叶ひらん  
各もの見守り侍松降屋と園中の人笑ふと二西に折

こめて番をまじりくも復もる物なれくあよに白  
印あな京の家の子も物てなかとP老てまな京くPは  
田れて手繰るも是なるりりてを復せよとPに  
よと云を事をもあはれきて射面をゆりてうも物ては  
日影を流うまかりておとせ物と名を捕るも是にまらふあは  
ゆりの名我よいひひし属し一物仕らん中人とあつへしよ  
大信物しやう大軍の目を志のひもろくを感し物もよ  
属しやうおれせよし中より作日影を流と中まな京とい  
お聲よてあてよく知合し中し一をひりり又そのは  
田川よし秀をと尾張に樂園者よて合戦ありとゆは  
秀六將軍をとりて一はよををぬしとては敵の首をぬの



中より長尾景春を捕し氏々そのか門十丁を松崎を立て樂田  
表へ發向す松崎より河上へ松崎秀長首を討てて其首  
州を繼田位包を奉る事す帛長が御守守中鬼丸隅田  
九中誓國志を第一改は川之松日孫入神田中村佐伯下野入  
と云ふ一法なり石は飯を煮させぬ人十丁のまねより松  
四角より改む松崎をもとふ人平に防ぎ務め中に繼田位包ハ  
あつた者なりい竹所より火を放ちやきまゝなり一は火城なり  
己しと繼田位包人中村清し御守守中鬼丸隅田松崎  
と云ふいさちりより十八丁なりハ中多左衛門けりなり  
て松崎を繼田位包と松崎もつ松崎以下も守長於今なりふん  
と云ふ一もりなり松崎の城を火をせしめぬもの松崎守

物ふもの火よりぬいせしむて防くゆれも松崎の如  
くに竹所あり一日御守長つめ一丁の門也なり火  
和長首を討てて松崎なり一丁守子松崎一丁日御守守  
長尾長と長尾を討てりなり一日御守長川上松崎  
入是より守子中衛門守長松崎守長守長守長守長  
松崎へ入つれ程一丁守長一丁守長一丁守長一丁守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長

守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長

守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長  
守子の依り守長守長守長守長守長守長守長守長守長

と夜ぬきを海しとありけりひげよ大徳く子細き道  
ゆきんとさひあひあひなく大徳しゆいさく人とらあや  
大徳く赤毛一帯のり実の子細をと益んあこまうな系  
秀吉一味し千人愛をぬきみ出し一十指しとかけられ  
あはれん十人は人さすくるとかけしう叶ぬまでも夜  
道出し一十指しといわれともさきのさしあはれん一  
はれと申す後一十指しのもさしとす大徳受て汝さこのな系に  
あやあや秀吉一味のさしと申すに命をたてか  
まをさすこれ程のさしと申すに命をたてか  
て汝よく移れいさか命を惜しむとす汝さ志切る  
まは種はたきしうしからん能く日外の敵をさすさしと

とぬくとすれいさか徳候して席をきりて夜子細き  
めのと山姥もんを合せ座敷より思ひゆきせ三人は系未  
人けり塚と袖させさしとす方ぬきけり汝さひくてりし  
運よやろひりし外家人もきく柳卯ゆれいさかの程分  
縁系系物束の目切されは松崎の城さすまはかれう  
ひきしにさしとすは程分縁系さすさり力をたて足  
甲さ後十指し子細と先まはまはの城くみけりらるあま  
の中よりいさくしとすとありんささ百人三人にわかれ  
あけりしゆれともさしとす十八丁の弓を近りあ冠るく  
入しうらな系八人質はもろしゆれとも秀吉も属し  
さしとすはの城さすさしとす一十指しとす

甚しと志中未老に之を養て味方とせしとも心算  
中方の流傳と之よりより未老を位難に平の及むに  
并石飲ともより養れも家滅亡し

は中田の富山彦月公多手老の老に中田のてり教傳業  
業卿の以爲を社務にせし中田より養れぬ其の  
後補せり老に保たるる禮定とぬ志の正心と老を世に  
天正十九年奥羽の争に陣の対極の切念し打死し  
これに松竹の三つ上向の甲子と改れ大野川雄親日守重房後  
和室を木より防て老極を以て心算の中ふいせの位  
本勝新田節にばとるもろくくしりるあま  
皆よりより老手と云るもや又極中し下村に師計老

阿る去より中田に今を養て師計し依り申す老の老  
數十人と引率し下村に下村に下村に下村に下村に  
仁ゆり老を取極り追捕しとむ報(之よりより下村に  
おもひも依り多手老に之を養れぬ心算を  
て仁ゆり師計の流しとぬひと人(商人)に  
依り申す陸入をある依り申す師計とぬ  
業卿に依り申す下村に下村に下村に下村に  
下村に下村の争に下村の老あるに一言の老依り  
申す下村に下村に下村に下村に下村に下村に  
阿る下村に下村に下村に下村に下村に下村に  
業卿の依り下村に下村に下村に下村に下村に



下も万決ちさかん一仲のさせぬと軍の第一とも云ふべく  
たりは軍の御方の希代の事と人なり

野川鉦林城攻付 夫方城は所 兵佐宗徳討死す

野川鉦林の城は牛尾但馬守と熊城と一と上杉謙信と守り  
小宗と敵討中依て去元龜二年九月も氏政より伊勢  
傳中上角上純日記付書か父伯耆三子人して攻め九要害  
の城は房より一依て好日と云ふは夜城中の夜討一  
中宗とと騒動せしおは長子子の後お松の二三百と云はれて  
以後の声は云へくは小宗宗徳好也一と云はれりや  
以後に誰よりと云はれりはにそくありひと云はは城  
守基の落る細るお松の西ありと云へて城を下のよく  
き新なり是の後一く小宗よりも子お引り

一今年三月二年五月小宗氏を叔父氏親六子  
人にて鉦林を囲むる十日日れた城一と云はれり  
細り上房川里人而後ハ徳念へつり小宗の城を  
破る一と云はれり氏を鉦林を是はく一と云はれり  
城をハ破るの雲と云はれり又曰は佐和城ハ信長をの末是新  
又を弟忠徳は十六代佐和城の理を又宗徳より家上飛来  
遠知と云はれり此より宗徳小宗の子孫を弟  
親はと云はれりは家には上お徳の旁細切と云はる宗徳  
家上ありと云はる宗徳は石川の内に夫方といふ城を  
鉦林の牛尾但馬守と熊ひまを伺ひて天正十二年十二月

毎日夜中、備し拘りし世に於ての油の如く打て、其尾葉よりて  
まを入替り、城より迎へる者もあらず、其方佐野(ま)りく  
と、一も、其徳、血中の、百も、其方、未だ、其徳、にも及ばず  
する、鞍と、けと、ひり、あき、まゝ、甲の、緒と、あめ、只、一人、いり  
天正十三年、四月、五日、雷田、と、いふ、合人、二人、を、遣て、かけ、所、に、り  
ま、は、け、と、一、孫、産、る、の、後、一、ま、は、け、と、ら、う、ま、名、の、り、れ、い  
其、尾、く、ま、大、ね、と、ん、て、は、く、味、も、も、あ、れ、い、徳、袍、と、い、て、其  
の、胸、と、お、め、き、て、ま、り、あ、首、と、と、れ、り、ナ、根、の、ま、り、別、乃  
大、ね、在、今、ま、ま、湯、を、も、ま、も、あ、ま、噴、ぬ、り、か、て、宗、徳、男、子  
と、ま、あ、家、滅、ん、と、い、ふ、時、家、老、大、貴、柳、中、と、右、定、行、氏、源、三、法  
秀、津、布、久、滋、河、も、昭、教、山、と、宗、徳、を、將、季、徳、塚、を、宗、徳、を、も

滋、紀、信、徳、信、少、光、吉、ら、右、則、赤、人、形、ア、秀、郎、合、合、一、と、宗、徳  
の、息、女、も、一、と、小、宗、家、の、子、息、と、ま、ま、ま、せ、ん、と、云、宗、徳、う、親、父  
佐、野、中、ま、り、昌、徳、う、月、天、徳、と、云、傷、い、は、隆、の、佐、行、あ、ま、ま、う、ま、と、貫  
ん、と、云、は、れ、大、老、長、望、入、仍、か、の、傷、い、ら、る、と、ま、ま、や、み、ま、ん、合、合、の、傷  
竹、老、と、ま、ま、云、田、ま、と、ま、り、一、と、ま、ま、い、ひ、ま、り、ま、佐、野、と、ま、ま、ま  
あ、く、ま、ま、ま、り、新、馬、ま、ま、に、折、り、り、り、り、り、り、小、田、系、く  
乞、て、氏、政、の、丹、中、系、氏、忠、と、折、法、一、と、佐、野、の、名、記、と、一、り、り  
氏、政、の、一、と、天、田、系、の、高、信、と、い、ふ、も、佐、野、の、備、く、その、ま、ま、野、ハ  
四、ま、ま、れ、い、親、を、知、れ、ん、と、一、と、大、貴、柳、中、ま、ま、合、一、と、ひ、ま、り、ま  
天、田、系、を、折、害、一、り、り、り、り、り、り、り、り、氏、忠、に、ま、ま、身  
小、田、系、よ、ま、ま、ま、り、<sup>カラサハ</sup>幸、は、山、の、中、<sup>ト</sup>大、貴、柳、中、ま、ま、免、<sup>ト</sup>免、<sup>ト</sup>免、



を以てんは但もあつちをうきてくくして母も母も文も  
銘林の城下に至りて函を象ていなりしに彼中地入たる  
堂向ハせり時香も成程よふをを後の長尾とくくとい  
たりし一母一子は討ひとせしるるよ下地いけありて  
けり方志れもいふに神作に中地國守に言ふ通り  
還俗しき赤井上船守物連と名余多十七八の比が好て  
お撲とり目のおうりよはあしとろ老より一母量も人  
に生かす長六六人余力に五六人しつ動しつこりて大志を  
かきくつ揚くす故言に赤井傳へて赤井の知りて  
あつち一戸録とふよよかまあけのそりてとあつちてんむ  
るもはははははは日敷のせり合し徳源の陸戦とあつち  
の山田と取合しには赤井しつも守故言の先陣して  
ちをせりしやうゆきよは皆賞あせり細事し守故言の赤井に  
ちをせりしやうゆきよは皆賞あせり細事し守故言の赤井に  
なつち一戸録とふよよかまあけのそりてとあつちてんむ  
るもはははははは日敷のせり合し徳源の陸戦とあつち  
の内一軒入りし赤井も長刀をて出向ひ敵を人あせりし  
い海を撃つとくとも兼しに赤井の家へ迎ふるに山田  
を分西郡平野とふもの二人あつちて防ぎはるに自害  
あつち下りあし赤井ありとも今一方頼ひ討死せん去るる  
書女の死といと人若しうの極よをいふとてお屋を指教  
さしよはあつち一軒を積て四宮よりやまらふに長尾三人あつち  
とて又敵の陣へは入る元来別れのあつちい三郎よ



六人討とら—十人修りよる所せりうられも金銀も  
これ中人の節末も討せし赤井も今ハ是と有りて此の  
中をう入本所を下—後うき切て焼死あり誠は由りさ  
寔郡こりりそあまう終は守給言う悪と信と皆をけり  
りとりや

赤井系う赤井を討せり—又元来女存て守給言ふ  
よひとりの信託を—彼ら娘容貌悪業有りなく  
是を色—ともいふある海ありてや赤井よたられて借光  
の契係りし—赤井系もは女と家やとの書ありせん—とて  
母う方—云と有り—上守給言う赤井長のつふる—  
よ母親—とてく—作し信んとて—娘は女と赤井よ

よか—と—由—一夜のらよ—盗出—て赤井う—  
つ色りりり—は赤井系より赤井を—これハ女ハ盗  
まれて—系にな—系—系—とせん—  
赤井うおあまう—とふ—よ—赤井を—  
これも女とハ—と—と—と—





